

哺乳類学会参加報告

井上 莉央南（ワイルドライフマネジメント事業部 関西支社）

ワイルドライフマネジメント事業部 関西支社
所属の井上です。今回、私は9月6日から9月9日までの4日間で開催された哺乳類学会 2024 年度大会に参加させていただいたので、ご報告いたします。

今回は関西支社のある神戸での開催ということで、社内からも多くの人に参加していました。私は昨年の沖縄大会に続き2回目の参加でしたが、学生だった昨年とは気になる発表や感じたことが大きく変わった気がします。学生時代はリス・ネズミを対象に生息地分断化の影響について研究していたため、「保全」をテーマにした発表を中心に聞いていましたが、今年は業務で関わることの多いクマ・シカを中心に「管理」がテーマの発表を多く聞きました。その中でも、特に印象に残った発表をご紹介します。

大会前日にプログラムを見ながらどの発表を聞きに行こうかと考えていた時、これは絶対聞きたい！と思った発表の一つが中本敦さんの口頭発表「ニホンジカ駆除は *Apodemus* 属 2 種のネズミ個体群を回復させる？」でした。中本さんは、昨年度にも対馬におけるシカの個体数急増が小型哺乳類の個体数に致命的なダメージを与えていることについて発表されており、今回はその後の研究結果も含めた発表でした。

近年全国的にニホンジカの個体数が増加し、過剰な採食圧による生態系への影響が深刻化しています。長崎県対馬も例外ではなく、2000 年前後からシカの個体数増加が目立つようになり、島内全域で下層植生の急激な衰退が生じているそうです。WMO には以前対馬でツシマヤマネコの保全活動に従事されていた方（箕浦さん）がいるため、対

馬のシカ問題については何となく知っていましたが、具体的にどのような影響が出ているのか、どれくらい深刻なのかはあまり把握していませんでした。シカの採食圧による下層植生の衰退が野ネズミの個体数に影響を与えることは以前から知られています。アカネズミ・ヒメネズミは野ネズミの中でも絶滅可能性が低いとされている種なのでその存続が危ぶまれる事例は少ないですが、生態系の中では中型哺乳類の重要な餌資源となっています。対馬では絶滅危惧種であるツシマヤマネコの餌資源であるため、シカが与える小動物への影響を把握するための調査が急務となりました（ちなみに箕浦さんは、もし魔法が使えるとしたら対馬のシカを全て超ミニサイズにしたいらしいです）。

対馬では島内の森林にシカ防護柵を設置しています。本研究では 2021 年から 2024 年にかけてその柵の内外にシャーメントラップを仕掛け、アカネズミ・ヒメネズミの捕獲調査を行いました。2021～2022 年の調査では、防鹿柵内では少数のネズミが維持されていたものの、柵外ではネズミの生息がほとんど見られなかったそうです。しかし、島内でのシカの駆除を進めた結果、2023 年以降では柵外でもネズミが捕獲されるようになり、個体数の回復が確認されました。以上の結果から、ネズミ類の個体数はシカの駆除の進行に伴って速やかに回復することが明らかになり、このことはツシマヤマネコの保全にも繋がると中本さんは発表を締めくくっておられました。

この研究の大きな目的はツシマヤマネコの「保全」でしたが、そのためには増えすぎているニホンジカの「管理」が必要であることがわかりました。WMO では「管理」の業務が多く、動物が好

きであるが故に心苦しい経験をすることもあります。しかし、生態系において最も大切なのはバランスであり、豊かな生態系を守っていくためには「保全」と「管理」の両方を並行して行っていくことが重要であることを改めて感じました。

最後に、今回の学会で普段扱わない種から最新研究まで幅広い発表を聞くことができ、大変刺激を受けました。参加させていただきありがとうございました。野生動物の保護管理を通じて社会の役に立てるよう、これからも邁進していきます。